



今月の予定

聖歌練習 ちょっと遅いですがクリスマスの練習も

名古屋:バザーのためお休み

- ・バザーが終わったら降誕祭の練習を始めます。
- ・主日聖体礼儀後、ワンポイントレッスンをを行います。
- ・毎主日朝、発声練習をしています。ご参加よろしく。

半田:11月30日(水)12時ごろから

名古屋指揮当番

6日ピーメン松島 20日エレナ広石 27日マリア松島

ズナメニ研究会

特別編 ビザンティンチャント

ギリシアでビザンティン・チャントを学んできたルキア舟橋さんからビザンティンチャントの手ほどきをしていただくことになりました。11月なかばごろと考えていますが、日程などは未定です。決まり次第教会およびウェブサイトに掲示します。<http://www.orthodox-jp.com/liturgy/Znameniy/chant.htm>

知って祈ろう - 奉神礼・聖歌入門

共同祈願、啓蒙者の連禱から「啓蒙者出よ」

ビザンティン以前の古代教会の聖体礼儀は、今よりずっとシンプルでした。集まる、聖書を読む、説教、共同で祈る、「感謝」すなわちパンとぶどう酒を捧げご聖体を頂き、散会しました。

今も聖書の読みと奉獻(大聖入)のあいだに共同の祈りが行われます。しかし、かつては今のような「連禱」の形ではなく、信徒がそれぞれに祈り、司祭がまとめました。「連禱」はビザンティンになってからの形です。

前回引用したユスティノス(2世紀)の『第一弁明』には「…朗読者が読み終わると、司会者が、これらの美しい教えを学ぶよう勧め、励ます話をする。それから皆一緒に立って祈る。祈りがすむと、先に述べたように、パンとぶどう酒と水が運ばれ…(67)」とあります。また同書56には洗礼後の聖体礼儀の場合ですが、「そこで私たち一同とともに、私たち自身のため、照らしを受けた人のため、また世界中の他の人々のために共同祈願が唱えられる。……」とあります。

2世紀末から3世紀初頭に活躍したカルタゴの護教家テルトリアヌスはキリスト教徒への迫害に対して「われわれは皇帝のためにとりなしの祈りを捧げ、皇帝の生命の長がらんことを祈り、帝国の平和、家内の安全、強力な軍隊、忠節な議会、立派な国民、平穏な世界など、人々や皇帝の望むものはすべて祈っている(『護教論』30:4-6)」と反駁しています。正教会が「天皇および国を司る者」と祈ることに違和感を感じる方がありますが、その国民や皇帝のために祈るのはローマ時代以来の古い伝統であることがわかります。

さて「大連禱」にくらべ「重連禱」は具体的な個々の願いについて教会が祈ります。共同体のなかの迫害に耐えている人、監禁されている人はもとより、そのほかの災難にある人、病気の人など具体的な一人一人のために教会は祈り、支えました。

ビザンティン時代になって信徒の増加、異端的な要素が混じり込むようになって、自由な祈禱文から定式文へと移行し、徐々に連禱の形が整ってゆきました。

続いて、洗礼の準備段階にある「啓蒙者」のために祈り、「啓蒙者出でよ」と退出が促されます。啓蒙者は語源的には教えを聞く者です。

「啓蒙者出でよ」という輔祭の呼びかけを聞かれたプロテスタントの方が「正教会は本当に昔のままを守っているんですね」と驚かれたことがあります。もちろん今は未洗礼の方も終わりまで出席できますし、ギリシアでは多くの教会がこの部分の連禱と「啓蒙者出でよ」を省略していますが、「聖体機密」が洗礼を受け神の家族となった信者だけに与えられた特別の会食、交わりであることを示す重要な一句だと思えます。

今冒頭で行われる「大連禱」はもともとは「信者の連禱」の位置で行われていました。冒頭に移ったのは11世紀ごろのこととされています。

参照

- キリスト教父著作集 第14巻、テルトウリアヌス2、護教論(アボロゲティクス) 鈴木一郎訳、教文館、1997
- 古代キリスト教典礼史、J.A. ユングマン著、石井祥裕訳、平凡社1997
- R. Taft.S.J., *Beyond East and West*, P.I.O 2001
- A. Schmemmann, *Historical Road of Orthodox Church*, SVS

ホームページのご案内

○「なごや聖歌だより」のホームページ

<http://www.orthodox-jp.com/music>

なごや聖歌だよりのホームページの表紙で名古屋教会の聖歌が聞けます。

○ 東方正教会の聖歌 <http://www.orthodox-jp.com/maria>

詳しく学びたい方のため正教会聖歌の特徴、聖歌の神学、歴史、など海外の資料も多数翻訳して掲載しています。

○ 正教会奉神礼研究 *Liturgia*

<http://www.orthodox-jp.com/liturgy> 奉神礼や聖歌の実践資料



ガードナーの『ロシア正教会の聖歌』は世界中で広く読まれている正教会聖歌の入門書です。ここでは現代日本の状況に合わせて適宜省略、解説を加えてご紹介しています。表はカリストス主教のFestal Menayonを参考にしました。

聖体礼儀

晩課や早課は日替わりの要素が多く音楽形式もスタイルもさまざまなのに比べ、「聖体礼儀」は変化する部分はわずかで、大半の歌は不変です。数少ない日替わり要素は前半部分(啓蒙者の礼儀)にあります。

「聖体礼儀」には三種類あります。(1)金ロイオアンの聖体礼儀、(2)聖大ワシリーの聖体礼儀、(3)先備聖体礼儀です。(1)と(2)の違いは司祭の唱える聖体機密の祝文だけです。金ロイオアンの祝文に比べ、聖大ワシリーのものは長く、それに伴って歌われる歌も、より装飾的でメリスマ的なメロディになり、祝文を読む時間をカバーしています。歌詞(ことば)は共通です。(3)先備聖体礼儀については次回別記します。

聖体礼儀の構造は基本的に大祭、平日に関わらず共通です。祝祭的な性質や度合いは音楽付けに現れます。

上記のアウトラインに見られるように、変化する歌はもっぱら啓蒙者の礼儀にあります。変わらない歌には調やメロディの指定がないので、ある程度音楽付けの自由が与えられています。

聖体礼儀の形式が特別な形をとることがあります。降誕祭と神現祭の前晩、生神女福音祭、聖大木曜日、聖大土曜日の聖体礼儀は晩課に続いて行われます。晩課から聖体礼儀への移行は、旧約の読み(パレミヤ:晩課の7)の最後の読みが続いて、小連禱、聖三の歌が歌われ、そのまま聖体礼儀に移行します。(多くの場合は聖大ワシリーの聖体礼儀を行います。)

聖体礼儀の式順

1. 啓蒙者の礼儀(ことばの礼儀)

1. 始まりの祝福と大連禱

2. 聖詠からとられた第1アンティフォン(祭によって変わる)

できれば附唱つきでアンティフォン形式で。続いて小連禱

3. 第2アンティフォン、第1アンティフォンと同様に歌うが、常に「爾の独生子」が続く。小連禱。

4. 第3アンティフォン、第1、第2アンティフォンと同様。

この間に教役者は「福音経」をかかげて小聖入を行う。(祭によって変る。)続いて聖入の句。

5. その日のトロパリとコンダク。複数の場合もある。両詠隊が交互に、指定された調で歌う

6. 聖三の歌。両詠隊が交互に歌う。教役者が歌うこともある。

7. 書札の読みのポロキメン。記された調で、アンティフォン応答形式で。

8. 書札の読み。

9. 聖詠の句とア Rilイヤ。その日または祭日の調で、アンティフォン応答形式で。

10. 福音経の読み

11. 重連禱

12. 啓蒙者の連禱

2. 信者の礼儀

13. 第1、第2の信者の連禱

14. ヘルビムの歌。荘厳に歌われる。両聖歌隊が聖堂中央に集まって歌われる。聖職者がパンと葡萄酒を捧げて「大聖入を行う」。

15. 第1の増連禱

16. 信経。会衆または詠隊が歌う、または誦する。

17. 聖体機密のカノン(アナフォラ)

(1) 司祭と詠隊のやりとり「平和の憐み...」

(2) 讃揚の歌「父と子と聖」

(3) 「聖聖なるかな」

(4) ハリストスの制定の言葉「取りて食らえこれ我が体」「皆これを飲め、これ我が新約の血」

(5) 感謝の歌「主や爾を崇め歌い」両詠隊が集まって歌うことが多い。

18. 生神女の歌。両詠隊が集まって歌うことが多い。祭の時は異なる。聖大ワシリーの時は特別の歌「恩寵を満ち被る者」、十二大祭の時は通常カノン第9歌頌と附唱が歌われる。

19. 第2の増連禱

20. 天主経。会衆または詠隊が歌う、あるいは誦する。

21. 領聖詞(その日の)。教役者が至聖所で領聖する間歌われる。司祭が多いときは時間がかかるので、領聖詞に加えてその日にふさわしい他の歌を歌うこともあ

22. 信者が領聖する間、領聖の歌「ハリストスの聖体を受け」を歌う。

23. 感謝の祈りと歌、感謝の連禱、終わりの祈り、祝福、発放詞。

・聖体礼儀中の説教は、福音の読みの中のほか、神品領聖中、終了直前に簡単に行われることもある。祭日の早課ではカノンの前の福音の読み後に行われる。

・通常の聖体礼儀では、ヘルビムの歌は「我等、奥密にしてヘルビムを象りИже Хервимы」が歌われるが、聖大木曜日と聖大土曜日は異なる。10世紀から12世紀には異なるの歌が歌われることも多かった。